
progress

天の群雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

progress

【Nコード】

N4910A

【作者名】

天の群雲

【あらすじ】

幼なじみと従兄妹の関係である拓人と沙綾。次第にふたりの関係は恋人へと進展（progress）していくのだが…。スタートに至るまでのふたりの成長劇。甘く切なく笑い有り？のショートストーリーです。

（前書き）

この話は多少電波を含むので、読んで頭痛等の症状がでた場合には直ちに休憩しましょう。それでも収まらない場合はかかりつけの医師にご相談くださいなw
初めての作品なんで覚悟してくださいね

話を聞くよりも実際に見た方が早いだろう。人によっては羨ましが
る様な状況ではあるが、俺にとっては…

「お兄様あ…いっしょにいこうよあ…」

俺を誘う猫なで声。

「まだ早い！もう少し我慢するんだ！」

「そんなあ、イジワルしないでよ…さあや、もう我慢できないよう
…」

上目遣いの潤んだ瞳。

「だからまだ早いつて！！なんでこんな真夏日に市民プールの開店
待ちをせにやならん！？」

…とまあ、こんな感じで俺、拓人^{たくと}は従妹の沙綾^{さあや}にせがまれているの
だ。

「だって…早く行かなきゃみんな並んでるよあ？？」

「並ぶかつ！！外は何 だと思つてんだ！？死ぬわ！！」

「プール…いっぱいになっちゃうよあ？？」

「なるかつ！！大体その気持ち悪い口調をやめろ！何なんだ、お兄

様あ…って!？」

沙綾は子供みたいに口を尖らせて俺を睨む。

「むっ…!!お兄ちゃんが隠してる本に書いてあったんだもん!!」

「な…!？」

(なんだ…このお約束な展開は!?)

俺は出来るだけ平静を装いながら素っ気なく話しかける。

「なあ沙綾…こんな早い時間から並んたってナンセンスだ。そう思わないか？」

「お兄様は妹に甘えられるのが大好きなんだよねえ あっ、それともご主人様の方が良かったかなあ？」

…聞いちゃいねえ。

「あっ…そうだ さあやねえ、お兄ちゃんが喜ぶかと思って…」

そっぴうと沙綾はおもむろに服を脱ぎだした。

「なっ…!お前何してるんだ!?!よせっ!!!」

とは言いつつも顔を隠した指の間からしっかりと覗き見る。

「じゃ…ん」

「な…そんな馬鹿な!?!」

「どう？似合ってますよ？」

グラビアアイドルのように腰に手をあてたポーズをとったまま自慢げに俺の方をみる。

その沙綾が身につけていたものは……

「スクール水着！？」

「お兄ちゃんの為に着てきたんだよ？何か気の利いたコメントは無いの？」

上目使いで俺を見つめてくる沙綾……

「B78・W54・H79。身長147cm、体……ぐはあ！？」

沙綾の渾身の右ストレートが俺の頬に炸裂する！！

「何でお兄ちゃんがさあやの3サイズしてるの！？っていうか真面目に聞いているんだからちゃんと答えてよ……」

沙綾の瞳が潤んでいまにも涙がこぼれそうになる。

やれやれ、ちよつとふざけすぎたか……

真面目に沙綾のことを見てみる。

まず髪型は結構上の方を黒いリボンで結わえてある、いわゆるツインテール。沙綾のトレードマークだ。

そしてまだあどけなさの残る可愛い顔。結構モテてるんじゃないかと思う。

最後に身体だが……まあ今年中学卒業なんだから……期待する方が無理

つてもんだな。スクール水着は確かに好きだが、それが更に沙綾の幼児体型を強調している。

「気を落とすなよ」

俺は沙綾の頭を優しくなでてやる。

「お兄ちゃん、なんかメチャクチャ失礼なこと考えてない…??」

「ぜ、ぜんぜん考えてないぞ！むしろ褒めてる…！」

前半だけが…。

俺の考えを察したのか沙綾は、あからさまに気落ちしている。

「さあや…魅力ないのかな…??」

うつ、沙綾のこの瞳はヤバイ…うるうる光線がチクチクと俺に突き刺さる。

背中に冷たい汗が流れたと同時に、ふと気づく。沙綾の様子がおかしい…。

何かを言いたそうにしているが何度も躊躇しているようにみえる。

「……………」

とうとう決心したのか、おずおずと話しだした。

「…………あ、あのね…いきなりこんなこと言ったら…お兄ちゃんびっくりするかもしれないけど…」

沙綾の肩がふるふると震えだす。顔はうつむいて耳まで真っ赤になっ
っている。

……いつかこんな日が来るんじゃないかと思っていた。沙綾の俺を
見る目は従兄ではなく……ひとりの男として捉えていたからだ。

この時に備えて自分の中では既に決心がついていた。沙綾が自分の
気持ちを伝えてくれたら俺は……

「さ、さあやね……あの……その……ひつく……うぐ……」

緊張のあまりに泣きだしてしまふ沙綾。両手で顔を覆っている。

自分でもキザだなと思ひながら軽く笑って、沙綾の肩を抱き寄せる
……。

「……うつ……ぐすつ……えっ??」

驚いて泣くのをやめた沙綾の首もとへ顔を近づけて、そつと囁いた
……。

「大丈夫だ……」

「そ、それって……どういう意……んっ!？」

皆まで言わせず俺は沙綾の唇を自分の唇でふさぐ。

眼前には瞳をまんまるくさせた沙綾の顔……。

そう……何も心配することなんて無かつたんだ……。いつだって沙綾は
俺を見ていてくれたし、俺も沙綾のことを見ていた。

もしかしたら、大丈夫という台詞は自分を納得させるために出た言
葉なのかもしれない。

自然と唇が離れる。沙綾をまっすぐに見据えて言葉を紡ぐ…。

「沙綾の気持ちはなんとなくだけど気付いてたよ…。ずっと前から…」

沙綾が一瞬驚いたような顔をした。

「俺も沙綾が好きだったから…その気持ちに気付いた時は嬉しかったよ。でも伝えられなかった…」

そう…それはふたりでいる時間が楽しかったから。告白する事で今の関係を失ってしまうのが怖かったんだ…。

「はは…情けないお兄ちゃんだろ…?」

乾いた笑いが出た。そんな俺を沙綾は…何も言わずにそっと抱きしめた。

「沙綾……?」

「さあやね…怖かったの…。もし自分の気持ちを打ち明けてフラれちゃったら…きつとさあや、お兄ちゃんのそばに居られなくなっちゃうから…つく…」

沙綾…泣いてるのか…?

「…それならね、さあやはずっと従妹のままでいようって…そう…したら…ぐす…っ…ずっとお兄ちゃんのそばに居られるって…ひっく…思ったの…!」

気持ちが高ぶったのか、沙綾の俺を抱く手に力が入る。

「でもね…とっても辛かったの…どうしようもないくらいに胸が…
ぐすっ…苦しくて…っ！」

…そうだったのか。沙綾も俺と同じように考えていた。変わってしまうのを恐れていたのは俺だけじゃなかったんだ…。それなのに…俺って奴は…！！

「沙綾の気持ちがあつきり分かるまでは自分の気持ちを隠しておこうって…こんなことを考えてたんだ、俺…」

自分の情けなさに涙が出そうになる。

「ありがとう…お兄ちゃん」

えっ…？俺は驚いて沙綾の顔を見る。

「お兄ちゃんがなにを考えてたんだとしても、さあやの事が好きって気持ちには違いないんだよね…？ それならさあやは…嬉しいよ」

えへへっという感じで柔らかく微笑む沙綾。

俺はこみ上げる暖かい気持ちを押さえきれずに思い切り沙綾を抱きしめた。

「沙綾…っ！！」

「あっ！？い、痛いよお兄ちゃん…！！」

俺はそのままベッドに倒れ込み、沙綾に激しくキスをした。

「んっ…はぁ…はぁ…お兄ちゃん…!!」

沙綾も夢中で俺の唇を求めてくる。

さっきまでのキスとは違う…本当の恋人同士の濃厚なキス。
ゼロ距離で俺と沙綾の舌が絡み合い、あたりにクチュクチュと水音が響く…。

脳髓までとろけそうな強い刺激が流れ込む。

「…っ…はぁっ…お兄ちゃん…!」

沙綾の濡れた瞳が俺を見つめる…。そこでふと気付く。

「そっぴゃ…沙綾、お前水着のままだぞ? いいのか…??」

「えっ…?…はぁ…はぁ…別にいいよ…お兄ちゃんの為に着てきたんだし…」

とろんとした目をしながら答える。

「……お前、さっきのやりとりの間中ずっとスクール水着だったのな」

「そ、そっぴゃけど…なんでそんな顔してるのかな…??」

俺は堪えきれずに吹き出してしまった。

「ぷっ…くっくっ…あっはっはっ!! スクール水着で告白だって

「!?聞いたことない!!…はっはっは!!」

ポカーンとして沙綾は俺を見る。俺が言ってることを理解したのかその顔に徐々に赤みが差してきて、表情が険しくなる。

「お兄ちゃんの……」

「くっくっ!!…えっ…?」

「お兄ちゃんの……バカーッ!!!!」

バキッ!!…ボキッ!!…!!

「がはぁっ!!…?ぐがっ!!…!!」

右ストレートと左フックのコンビネーションがそれぞれ顔面とレバーを的確に捉える。っていうか…今、肋骨…が…。

「ふ……良いもの持ってんじゃねーか…姉ちゃん……」

ドサッ…。俺は沙綾の上に覆い被さるように崩れ落ちた。

「…えっ!?!お兄ちゃん!そんなっ…起きてよ、お兄ちゃん!お兄ちゃんってばぁ!!」

薄れゆく意識の中…沙綾の体温を感じながら俺は思っていた。やっとここまで来たんだ…。焦ることはないさ。時間はまだまだある…。

「さあやこんな才チ嫌だよ！！目を覚ましてよう…なんで満足そんな顔してるの！？」

満足そう…？満足したんだよ。だって…やっとふたりでスタートを
きれたんだからな…。

ここで俺の意識は心地よくまどろみの中に落ちていった。

（後書き）

おめでとうございます　ここまで読めたと言うことは、あなたと私は友達になれるということです。全然嬉しくないですって？またまた…遠慮なさらずにw

どうでしたか？ふたりの進展は？そんなに大袈裟なものではないと思いますが、少しでも共感された方がいたら嬉しいですね。付き合っ
て下さりありがとうございます。

感想、リクエスト等あればメッセージをお願いします（・-ハ*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4910a/>

progress

2010年10月15日23時43分発行